

問題 14. 腺癌

症例：70 歳、男性。腹部腫瘍。

検体（採取法）：肝多嚢胞性病変（穿刺吸引）

染色：パパニコロウ染色

問題：正しいものに○、間違っているものに×を下さい。（VS：バーチャルスライド）

1. VSでは、血性背景がみられる。 ○
2. VSでは、腺癌細胞がみられる。 ○
3. 肝細胞癌よりも発生頻度が高い。 ×
4. エキノコッカスとの強い関連性がある。 ×

解説

肝多嚢胞性病変からの穿刺吸引細胞診であり、血性背景に、孤立性～小集塊状の類円形～円柱状細胞が認められる（図 1）。拡大を上げると個々の細胞は異型を示し、クロマチンの増加と不均等分布、核縁の肥厚、核形不整、肥大した核小体がみられる（図 2）。核は偏在傾向にあり、細胞質には空胞状変化がみられる。一部には細胞質内粘液がうかがわれる（図 2 inset）。以上より、腺癌と診断できる。原発性腫瘍では、腺癌よりも肝細胞癌の頻度が高いが、多嚢胞状を示す肝癌としては、粘液性嚢胞腺癌と胆管乳頭状腫瘍由来の腺癌が主な鑑別疾患となる。前者では、胆管との交通はみられず、多くは卵巣様の間質を伴う。後者は、胆管と交通し、嚢胞内腔に乳頭状増殖を伴う。肝内胆管癌と肝吸虫との関連性は認められるが、エキノコッカスとの強い関連性はない。最終診断は胆管内乳頭状腫瘍由来の肝内胆管癌であった（図 3, 4）。

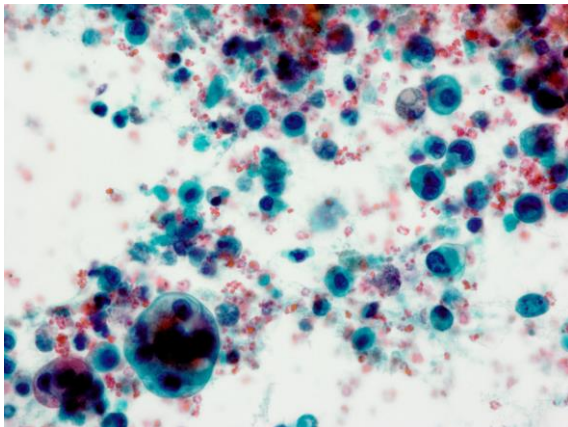


図 1

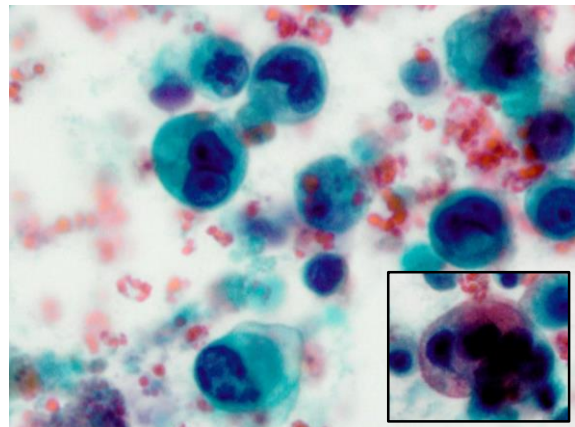


図 2

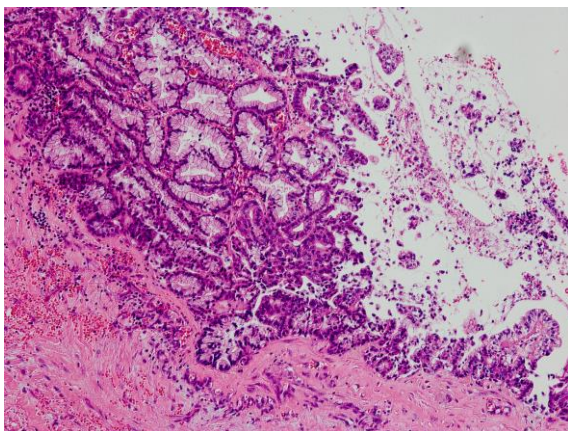


図 3

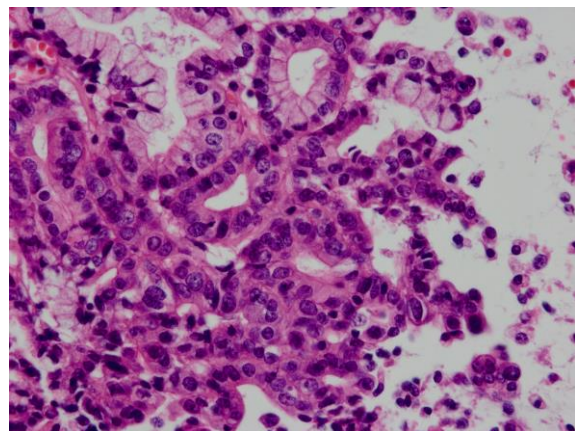


図 4